

中島隆博著「中国哲学史—諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで」中公新書、中央公論新社 2022年2月25日刊を読む

### 正しさとは何か「名を正す」<sup>せいめい</sup>正名

1. (1)言語は実に悩ましい。古代中国において言語をどう手なずけるのかは、哲学的にも政治的にもきわめて重要な問いであった。そのなかでもよく知られているのは、「正名」(名を正す)という概念である。『論語』においてなされた次の問答は、正名がどこで問われているかを明らかにしている。

(2)子路が言う。「衛の君主が先生をお待ちして、政治を司らせようとしています。先生はまことに何をなさるのですか」。孔子は答えた。「きっと名を正していこう」。(『論語』子路)

(3)つまり、正名は実の政治的な活動として捉えられている。しかし、それはいったいどういうことなのだろうか。

### 2. 政治と正名

(1)「政は正である」(『論語』顔淵)とも言われるよう、政治は何らかの「正しさ」もしくは「正しい秩序」をこの世界にもたらすと考えられていた。では、どのような正しさや正しい秩序が目指されているのか。

(2)斉の景公が政治を孔子に尋ねたとき、孔子は答えた。「君主を君主とし、家臣を家臣とし、父を父とし、子を子とすることだ」。公は述べた。「すばらしい。君主が君主でなく、家臣が家臣でなく、父が父でなく、子が子でなければ、食べ物があってもそれを食べることなど許されようか」(『論語』顔淵)

(3)「君主を君主とし、家臣を家臣とし、父を父とし、子を子とすることだ」。これが正名の具体例である。ここから、君臣と父子という関係が、孔子の考えた正しい秩序の根幹にあることがわかる。

3. (1)ただ、それを今日においてそのまま適用することは難しい。ヒエラルキー的な関係性や、性別を前提とする関係性を素朴な仕方で肯定することはできないからだ。それでも、たとえば大工が大工らしくあるというはどうだろうか。家を建てようとする人にとっては、大工らしい大工の方が、そうではない大工よりも望ましいことだろう。医者や、運転士なども是非そうあってほしい。このように、職業に関しては、「名」と「実(実体、実質)」が一致してもらった方がはるかによい。

(2)とはいえ、正しさというのは諸刃の剣でもある。職業においてはまだ維持できるかもしれないが、しかし、昔の大工と今の大工が想定している正しさがまったく同じというわけにはいかない。

(3)要するに、何らかの疑いえない正しさがあらかじめあって、それに実体を合わせていけばよい、というわけではないのだ。その逆に、正しさはその時代の社会的想像力の中で定義し直され、鍛え直されていくものである。

＜コメント＞

「名を正す」とは何か。「大工が大工らしくある」とはどのようなことか。家を建てようとする人にとっては、大工らしい大工の方が、そうでない大工より望ましい。医者や運転士なども是非そうあってほしい。このように職業に関しては「名」と「実(実体・実質)」が一致してもらった方が、はるかによい。ただし、何がその実(実体・実質)であるべきか。その「実」つまり「正しさ」はその時代の社会的想像力の中で「定義」し直され、鍛え直されていくもの。「教え方日本一」の「実」もこれと同じ。

2025年12月1日